

もすがらあくがれて云々、又碧玉集に、花かすむゆふべをとへばおぼるよの月にもなりぬを
ちかたのさと、など後世には猶おほかるべし、

〔源氏物語三十五〕春のおぼる月よ、秋の哀はたかうやうなるもの、ねに、むしのこゑよりあは
せたる、たゞならず、こよなくひゞきそふ心ちすかしとの給へば、略下

〔平家物語四〕いつくしま御かうの事

この日ごろ聞えさせ給ひつる、いつくしま御かうをば、西八條のていより、すでにとげさせおは
します、三月もなかばすぎぬれど、かすみにくもるあり、明の月はなほおぼる也、

〔新古今和歌集春一〕百首の歌奉りしとき

源具親

難波がたかすまぬ浪もかすみけりうつるもくるも臙月夜に

〔異本塔寺長帳六〕慶長十四年三月四日、東西南北二月四ツ現、南西北ノ月動夜九ツ時消

月重出
月光呈異狀

〔日本靈異記下〕災興善表相先現而後其災善答被縁第卅八

山部天皇武桓代延曆三年歲次甲子略中 次年乙丑年秋九月口口日之夜、竟夜月面黒光消失空闇

也、同月廿三日亥時、式部卿正三位藤原朝臣種繼於長岡宮島町、而爲近衛舍人雄鹿宿禰木積波々
岐將丸所射死也、彼月光失者、是種繼卿死亡之表相也、略下

〔三代實錄清一〕天安二年九月三日辛酉夜月中有黒色、須臾月色赤如血、

〔三代實錄清七〕貞觀五年二月十九日壬子、自十六日至十八日、日初昇白無光、月初出赤如丹、今日並
復舊、

〔三代實錄清十一〕貞觀七年六月廿一日庚午、遲明、月色正黃、有赤雲覆之、

〔三代實錄光四十九〕仁和二年四月十四日癸亥、是夜自子至丑、月黒无光、寅時自下端稍成光、

〔日本紀略醍醐〕延喜二年六月五日終日見月、